

平成26年度 第2回北海道大学次世代大学力強化推進会議 議事要旨

日 時 平成26年12月10日(水) 10:30~12:00

場 所 事務局 第1会議室A

出席者(学内委員)

山口総長、上田、新田、安田、川端、村田の各委員 計6名

出席者(学外委員)

・研究関係 荒金、石川、小砂、駒橋、丸山の各委員 計5名

・国際関係 板垣、井上、黒柳の各委員 計3名

出席者合計 14名

陪席者

川野辺国際本部副本部長、島国際本部副本部長 大山研究推進部長

議題1 委員紹介(資料1)

資料1に基づき、研究関係および国際関係の学外委員の紹介が行われた。

議題2 前回議事要旨の確認(資料2)

資料2に基づき、前回議事要旨の確認が行われ、了承された。

議題3 次世代大学力強化推進会議について(資料3)

川端委員から、資料3に基づき、次世代大学力強化推進会議について、本学の大学力強化推進体制、研究大学強化促進事業の取組について説明があった。

議題4 Hokkaido ユニバーサルキャンパス・イニシアチブについて

(スーパーグローバル大学創成支援事業における採択構想)

上田委員から、資料4及び資料5に基づき、文部科学省補助事業「スーパーグローバル大学等事業」における採択構想であるHokkaido ユニバーサルキャンパス・イニシアチブについて説明があり、おおむね以下のような意見交換があった。

- ・ 対外的に北海道大学とは何かを示す、いわばフラッグを示すべきではないか。
- ・ 留学生や外国人教員を本学に招聘する様々な取り組みは素晴らしいが、彼らの家族(特に女性)のためのメニューを組み立てることも重要ではないか。
- ・ 国際的なOB組織やアンバサダーを組織するだけでなく、そういった人々を定期的に招聘して意見を聞くなど活用すべきで、その旅費等を支援すると良いのではないか。
- ・ 北欧やカナダ、北極などのターゲットエリアは非常に面白いと思うが、それを貫く考

え方はどうなっているのか。

- 北大はグローバル大学を目指しているが、国際社会への貢献だけでなく、例えばバン
グラディッシュのダッカでは北大歯学部の関連医院が長期の貢献を行っており、この
ような外国の地域への貢献という点も重要ではないか。
- 外国の留学フェアでは優秀な学生の取り合いになっている。海外の学生のリクルート
を本気でやらないといけないのではないか。
- 世界的に北の一番南に属しているという意識を強く持って、北方の大学と組む計画で
あるが、確かにそれを目標には書いていない。
- 北大のお客様は誰なのか、18歳人口が減少する状況で、お客様の数が減るというこ
とを徹底的に考えなければならない。たとえば、高齢化社会における社会人学習、アジ
アの人々というような、ターゲットを微調整する戦略を作ってはどうか。
- 「北大らしさ」がもっと全面に出てくると、より良いのではないか。例えば、新渡戸
カレッジ、新渡戸スクールはいかにも北大らしく、また、先ほど話のあった研究領域
なども強調するとよいのではないか。
- 企業の研究を競う国際大会があるが、いい研究が必ずしも賞を取る訳ではない。賞を
取るにはどうしたらいいか、何が足りないかをちゃんと解析して目指すべきことをや
らないといけない。ランキングについても、外から見る北大のイメージ、フラッグと
いったものを頑張っアピールしていかないと、グローバルに認められることになら
ず、ランキングにはつながらないのではないか。
- 札幌市は、①国際競争力の獲得、②多文化共生社会の実現、③海外ネットワークの活
用を基本方針とした札幌市国際戦略プランを策定したが、大学研究機関との連携は切
っても切れないものであり、今後とも密な連携を期待している。
- 国際関係の学部を出た学生をみてきたが、それぞれの大学で学んできた特徴というの
がよくわからない。北海道大学のグローバルとは何が売りなのか、しっかりと作っ
ておく必要があるのではないか。
- 国際の仕事で伸びる人は、国際関係よりも、法学や工学などのソリッドな学問をや
ってきた人が多い。ソリッドな学問をしっかりと勉強させた上での国際というのが重要
なのではないか。
- ユニバーサルキャンパス・イニシアチブから北海道という固有名詞を除くと、他大学
と同じように見えるのではないか。北海道大学では、何が学べ、何が身につく、ど
ういうメリットがあるのかという売りの部分がないと、優秀な学生は集まらない。
- 新渡戸システムは、専門性はしっかりと押さえた上で、さらに付加価値をつけていく
というような方向性で進めていきたい。
- 「北大らしさ」という部分については、教育の点からみると総合大学であるため語り
にくいというところがあって、悩みどころではある。
- 日本人の留学生が減っている中で、新渡戸カレッジに積極的に取り組ませる仕掛けは

どうなっているか。

- ・ 新渡戸カレッジには120名の募集枠に400名程度の応募者があり、留学への意欲が下がっているとは思っていない。留学できる仕組みや、奨学金の問題が大事である。お金の面では新渡戸カレッジ奨学金ということで、新しくフロンティア基金から学生が留学する場合には支援するという制度を整備した。
- ・ 意識付けということでは、豊富な海外経験を持つ同窓生などにフェローをお願いし、海外で活躍した経験を学生に伝えていただく場をたくさん用意している。
- ・ 「北大らしさ」の情報発信のための広報戦略が非常に重要になってくるのではないかと。例えば、海外と協力しながらやっている現場の事例をたくさん集めて発信していくと、北大に行くところということが学べるということが伝わるのではないかと。北大に行こうとする動機付けをもっと網羅的にやったほうがいいのではないかと。
- ・ 企業も国際化をトップダウンで進めているが、その理由はお客様が国際だからである。大学の国際化も、留学生を増やすのが目的ではなく、やはり国際的な競争力を上げるのが目的ではないかと。その結果として留学生が来るものだと感じている。
- ・ 人事制度の国際化など、外国人の教員をもっと増やすようなことがないと、やはり日本人だけでは大きな発想や成長には限界があるのではないかと。
- ・ 海外の企業との共同研究や留学生を受け入れるためには何らかのインフラの整備もしていかなないと、今の現状のままの制度の中では非常に難しいものがあるのではないかと。それを打破するには、総長のトップセールスが絶対不可欠である。どんどん総長が海外に足を向けて、この北大の良さなり、北大の受け入れの体制といったものを、現地で説明するのが一番効果的ではないかと。
- ・ ノーベル賞が取れない時期に、ノーベル財団に話を聞きにいったら、日本への招聘や海外でのセミナーが重要ということを言われた。これは例であるが、そういった取り組みが必要ではないかと。
- ・ ランキングに関して、イギリスでは、大学教育、大学そのものを世界に売り出すということをやリ、英語圏であるという強みを最大限に発揮してランキングを出すことで結果的にイギリスの大学ブランドというものを世界に広めた。ランキングの基準も頻繁に変更されるという悩ましさがある。
- ・ 今回のイニシアティブの中では、サマーインスティテュートなど一見教育プログラムに見えるものがあるが、実はその基本は海外の一流研究者を本学に呼んでくる、本学の実態を見てもらう、かつ本学の優秀な研究者とコラボしてもらうということが隠れた狙いであり、それによりランキングに繋げていくというのが全体的な戦略である。
- ・ 今後もランキングの基準は変わりうるという前提でランキングに付き合う必要がある。

議題5 その他

議長から、次回は平成27年3月11日（水）14時から開催することの案内があった。